

【資料紹介】

## 翻刻 渡部寛一郎日記2続（明治三十一年・三十二年）

渡部寛一郎文書研究会

（要木純一・竹永三男・板垣貴志・内田融・大國由美子・大原俊二・

居石由樹子・小林啓治・小林奈緒子・杉谷直哉・原洋二・本井優太郎）

### 摘要

渡部寛一郎文書は、渡部寛一郎日記、剪淞吟社に結集する人々の漢詩と関連文書、若槻礼次郎ほかの渡部寛一郎宛書簡、私立中学校修道館など渡部寛一郎が関わった教育関係文書などで構成されている。中国文学・歴史学などの学際的研究によってこれらの諸文書を解説・分析し、近代日本の漢詩文学と政治文化の関連を山陰地域に即して実証的に追究することが本プロジェクトのめざすところである。今回は、渡部寛一郎日記第二冊（明治三十一年・三十二年）の手帳の後半部分を翻刻紹介する。渡部寛一郎が、彼が校長を務めた修道館中学の経営のために、主に東京で活動する様子が克明に記されている。

キーワード・渡部寛一郎 近代 政治 教育 漢詩

### 【解説】

前号の渡部寛一郎日記2（明治三十一年・三十二年）の続きである。渡部寛一郎は、非常に几帳面で周到な人で、出張に際して、関係者の住所録メモをあらかじめ用意している。また、尾崎行雄の演説や、自分の演説、旅行の諸費用等も詳細に記している。

### 【凡例（前回に追補）】

原文の判読不能文字は字数に従い□とし、その他原文に記載された

記号（○、△等）は当該記号をそのまま記した。

### 【渡部寛一郎日記2続】

【手帳の裏の方の一ページより、上下逆さまで始まる。旅行に関する住所録やメモ】

大坂西区九条番外二五六一

渡部善継

本郷森川町一番地橋通住田三ツ方 渡部金一郎

簸川中学校長横沢文也氏宿所ハ

京橋区元敷寄屋町二丁目三番 細井長助方

松平家へ主島ヨリ傳言之次第

御前様姫身ノ□□ヲ尋テ塩釜ノ掛物ノ事ヲ談スルコト

牛込若宮町三三白石内 浅井郁太郎

小石川小石川水道町三九 木村峰之助

【九月十五日尾崎行雄の演説に関するメモ】

会場 高等商業学校講堂

時刻 十五日午前九時ヨリ

【計算式あり。略す】

牛込区弁天町百十一番地 池田守吉

本郷弓町二ノ三宮本方 曾田忠太

麻布鳥居坂尋常中学校内 江原素六

神奈川町青木臺町七九 山本氏

【以下は尾崎行雄の演説か】

○進テ大学ニ入ル者ト、中等国民タルニ相対スル丈ケノ教育ヲ止ムル者トハ、理論上自ラ別ナラサルヲ得ス。

○又実地如何ト申セハ、中学令第一条ニ二様ノ目的カ示シテアルニモ拘ラス、教フル者モ被教者モ、共ニ余備的ノ一方ニ傾ク憂アリルカ如シ。依テ、理論實地共ニ二種ニスルヲ可トス。尤、編制上三付、別ニ腹案アレトモ、決定ノ上述フルヲ、敢テ遅シト為サスト存候云々。

江戸川町十六番松橋内 西村賢

本郷区元町二丁目六十六番地 茗溪会

明年七月募集農科大学内獣醫科

○程度尋常中学校 卒業生ハ無試験【檢】

○本科生救助費十五円 実科生八十二円

右陸軍省ヨリ支給スルトノコト

道三町農商務省地質課

(地図あり)

梟

湯町

湯島三組町八一 松原新之助

日本橋濱町三丁目壹番地へ九号 和田玉一

牛込区東五軒町四十四 高木豊三

本郷区森川町一番地一七五 岡田方 大谷君

日本橋区岩付町三番地 野沢十右衛門方 福岡修猷館長 隈本有尚

麹町元園町一丁目四八 有島保常方 東奥義塾 杵山寿【薫の誤り】之進

牛込矢来町一番地 柴田柴一郎

神戸下山手通七丁目二二 山崎光享

九月廿六日 金拾五円

右松平直哉氏寄付金領収

九月廿八日 金參拾円

右山口安井両名宛ニシテ来年三月迄ニ足羽家從へ迄【衍字か】返濟之

約定ニテ五円借

但伯爵へハ内證之筈

明治卅一年十一月

廿九日決算摘要

卅一年度帳面 = 54,429

修道会費 = 6,508

惣計 = 60,937

内訳

館長 = 53,.....

海 = 5,.....

現 = 1,707

出大 = 1,200

×

旧十二月二日決算

帳簿 = 58,587

会費 = 6,898

計 = 65,485

内訳

館長 = 53,300

海野 = 5,000

現在 = 5,985

出大

= 1,200

川工

十二月三日

館長 = 7,000

計 = 60,300

五日

長 = 11,000

十二月三日

帳 = 79,237

会 = 7,828

惣計 = 87,065

内訳

館長 = 71,300

銀行 = 7,.....

現 = 1,845

海 = 5,.....

大出 = 1,200

渡精 = 720

×

十二月九日調

館長 = 78,300

四月十五日借

△金貳円 收入之内

同十六日

金四円 東脩四人分

十七日

金四円月謝之内

【以下本人スピーチ原稿か】

本日ハ、先生還曆ノ御奉賀トシテ、旧門弟諸衆ノ催サレタル、此盛宴ニ侍スルハ、何寄ノ光荣ニ存ス(シ)マス。全体先生ノ碩学高德ノ芳名ハ、夙キ山村先生ト共ニ我地方ニ依ヘラレテ、後進子弟悉クノ仰慕ナル所ナアル。未故ニ別個ノ關係ナリトモ御奉賀―全体、先生ノ為メニ、特ニ一席ヲ設ケテ、祝意ヲ表セント思ヒシモ、旧御門弟方トニ様トナルモ(レハ)、先生ニ於テ却テ御煩勞ト推察シテ、各々此席ニ於テ軽品ヲ御膝下ニ呈シテ、聊カ祝意ヲ表シマス。序ニ御斟酌アラハ、本懐ニ存シマス。尚先生ハ我地方碩学老儒ノ御十人トシテ、当ニ後進子弟ノ仰慕スル所ノ御身トニシテ、初度ノ春ヲ御迎ニナリテ、其矍鑠トシテ心身共ニ御壮健ナルノミナラス、日々子弟訓【薫の誤り】陶ニ御従事被下有候様ハ、壮者モ及ハサル勤勉ニテ、所謂教テ倦マス。云々ハ後進子弟ノ為メ大賀スヘキ事ト存シマス。願クハ先生ヲシテ到所不蹙不崩南山ノ寿域ヲ開カシメンコトヲ。地方後進ノ為メニ□□ニ不堪也。

【計算式あり。省略】

【以下出費メモ】

記

六月十五日

金六十弍円〇弍(六)錢持出

内

金十八錢五り

境マテ船賃

金弍錢五り

船中新聞代

金拾錢

船中茶代

金壹錢

棧橋賃

小計三十二錢

金四十五錢

境香川方

二飯代茶代共

金十三錢

端艇賃

金二円五十錢

汽船賃

金六錢

荷物二袋

金拾錢

揚賃

金拾錢

敦賀上陸

金拾錢

端艇賃

小計三円廿四錢

金拾錢

大黒屋支店

金弍十錢

茶代并荷物賃

金三円五十錢

東京へ電報料

金弍十錢

敦賀ヨリ新橋迄行

金七錢

夕飯代

小計三円九十九錢

茶代

金十二錢

車中朝飯代

金十錢

同菓子代

○金三十二錢

新橋ヨリ

小計五十四錢

原町マテ車代

通計八円〇九錢

金拾壹円

謙一郎へ

本月分

金五円 矢田方へ

内三円五十銭目録別

金式錢五り 湯賃

金四銭 頭掃除賃

金式錢 芝菖蒲見料

金五銭五り 扇子一本

金三十六銭 子供

蚊帳一釣

金五銭 菓子代

小計十六円五十五銭

通計金二十四円六十四銭

○金四銭 信濃町迄

汽車代

○金式十式錢 四谷ヨリ

帰途車代

十九日

○金四銭 飯田町迄

汽車代

同 同所ヨリ

○金十一銭

原町マテ車代

同

金壹錢五り

同 湯賃

金十銭 東京地圖

同 神田ヨリ車代

○金十五銭

小計六十七銭五り

通計二十五円三十五銭

金六銭 筆紙式帖

金三十銭 郵便切手代

金二十銭 牛肉

金五銭 砂糖代

金三十銭 竹簾代一間二三尺

金二銭 葱代

小計九十三銭

廿日

通計金二十六円二十八銭

金八十銭 榎、清水進物

金四銭 用麦酒四本

金十銭 頭掃除代

菓子代

小計九十四銭

廿一日

通計金二十七円二十二銭

二十二日

○金八銭 飯田町ヨリ信濃

町往復汽車

同

○金十八銭

飯田町ヨリ原町

金十銭

小ブラシ代

マテ人力車代

廿五日夜

金七十銭

秋上ト同伴

同

金三銭

湯賃

小計一円廿五銭

金二十八銭

木履壹足

通計三十一円七十八銭

金四十銭

数藤方進物代

○金二十七銭

千代謙一郎

○金二十九銭

四谷往来

等ト同伴車代

車代

金壹円〇二銭

真影連写代

金五十六銭

松平家

金四銭

鬚剃賃

御見舞

金壹銭五り

湯賃

金四銭

鬚剃

金十五銭

名刺五十枚

小計一円四十四銭

金六銭

春子翫弄物

廿三日

通計二十八円六十六銭

通計三十三円二十八銭五り

○金壹円五十銭

鎌倉行往復

金壹円六十銭

廿七日三人西

○金貳十二銭

人力車賃

洋料理代

廿五日

二十八日

金十五銭

牛肉代

金十五銭

郵便切手代

小計壹円八十七銭

同

通計三十円五十三銭

金廿五銭

目次進物菓子代

○金貳十四銭

松平邸

○金三十五銭

松平邸其他車代

往復車代

金五銭五り

鬚剃賃

金六銭

パン代

湯賃

金十五銭

状袋

小計二円四十銭五り

廿八日

通計三十五円六十九銭

○金十六銭

四谷ヨリ車代

金五円

酒代并車

代引の余千代へ

渡ス

○内三円一銭車代

一日

○金廿銭

上野ヨリ帰途

車代

○金十五銭

神田ヨリ車代

金三十銭

昼食代

金二十一銭

郵便代

金十三銭

名刺入

金十六銭

巻紙ト花紙二束

金十五銭

提灯一張

金拾二銭

一日夜二ヶ所寄席

小計六円五十八銭

一日

通計四十二円二十七銭

二日

金拾五銭

菓子代

金壹円十銭

謙一郎へ書籍代

○金三十四銭

四谷往來車代

金四銭

鬚剃代

金三銭

蠟燭代

金五銭

ラムネ代

小計壹円七十一銭

三日

通計四十三円九十八銭

四日

○金三十一銭

上野浅

草両地へ往來

車代

同

金三十五銭

同上昼支度

同

金十銭

動物園内ニテ

雑費

同

金二十銭

浅草土産代

同

金七銭

公園内茶代

小計一円三銭

通計四十五円〇一銭

五日

○金三十六銭

四谷往來車代

六日

金七銭五り

沢庵一本

玉子三ツ

同

金七銭

パン一斤半

七日

金壹円六十銭

シャツ上下

同

金九十七銭

謙一郎上同

小計三円〇七銭五り

通計四十八円〇八銭五り

七日

〇金六十八銭

四谷ヨリ麻布

新橋ヲ経テ帰宿

車代

長が行賃

八日

金壹円九十二銭

長野行汽車代

金十六銭

途中弁當

金五銭

善光寺へ賽銭

金二円廿二銭

宿拂

金五十銭

同上茶代

金三十銭

同上女中

金三円十四銭

長野ヨリ

帰京汽車

金十八銭

途中弁當

金八銭

正宗一本

金四銭五り

新聞二枚

〇金二十六銭

上野ヨリ原町

辻車代

金二十一銭

郵便切手

小計九円七十四銭五り

九日

通計五十七円八十三銭

十日

金三十五銭

塩谷へ進物代

同

〇金二十三銭

飯田町車代

小計五十八銭

通計五十八円四十一銭

十一日

金三十銭

琴爪入

金廿七銭

およし土産

金十六銭

木綿袋ま起へ

金廿五銭

楊枝入二ツ

金三十七銭

カフスポタン

金十銭

女襟三ツ

金十五銭

頭掃除バケ

金貳十一銭

匙一本

金十五銭

鹿ノ子 二ツ

金十五銭

シボリ

金十五銭

カンサシ

金十五銭

一本

金一円十錢五り 手巾二

タース

○金拾八錢

汽車賃

山本宅訪問

金八円五十錢

反物

往來車代

四反

金三十七錢

鎌倉マテ汽車代

金二錢

柳通二本

○金三十錢

島津邸

○金二十二錢

林視学官方

金七錢

往來車代

訪問往來賃

金七錢

鎌倉ヨリ大船

小計十一円八十五錢

金拾二錢

汽車代

十一日

通計七十円二十七錢

金十五錢

大船夕飯

十二日

金拾円

謙一郎渡

十二日

金三円六十五錢

大船ヨリ大坂

同

金壹円

同人諸買物

十三日

マテ汽車代

同

金八十五錢

山本氏方

金十五錢

大船夕飯代

祝儀進物

同

名護屋

同

金七円

矢田方

金十二錢

同上謙一郎分

諸雜費引渡

○金十三錢

大坂西区マテ

同

金壹円

小包其他

○金十三錢

車代

○金四円廿五錢

車屋注文別

小計式十九円七十五錢

以上東京諸入用

通計百円〇〇三錢

金四十二錢

神奈川マテ

○金四十四錢

難波停車場

往来車代

金六十銭

境昼飯代

金三十六銭

天下茶往来

金貳円

同地学生十四  
人分昼支度

汽車代

松江泊舟賃

金二十八銭

天下茶代

金十八銭

船中并棧橋賃

氷并茶代

金三銭

金五十銭

春のへ土産

小計二円九十一銭

金十銭

浪花へ

通計百一円七十三銭

金五銭

慶之進へ

以上

小計壹円七十三銭

通計百〇一円七十六銭

○金十三銭

九条ヨリ梅田マテ

車代

〔付記〕  
本稿は、

金壹円四十二銭

敦賀迄

島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト

汽車代

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克堂と

○金八銭

大黒屋迄車代

剪淞吟社の学際的研究―(課題番号一九一三 期間 二〇一九

金三銭

剃鬚代

～二〇二一年度 代表 要木純一)

金四十五銭

電報打

及び、

式回

科研費 基盤研究(C)

金壹円九十五銭

大黒屋宿所

近代山陰地域の漢詩と官僚出身政治家の文化教養環境―中国文

金二十銭

茶代

学と日本史学の学際的研究 研究課題\領域番号19K00296 期間

金二十銭

女中へ

二〇一九～二〇二一年度 研究代表者 要木純一

金二円五十銭

境泊船代

による成果の一部である。

小計七円〇六銭

通計百〇八円八十二銭

金十銭

敦賀端艇

## Reprint ; Diary of Watanabe Kanichirou:1898 – 99

(continued from the last number)

Research Project on Works of Watanabe Kanichirou

### [Abstract]

Watanabe Kanichirou (1854 – 1938) was an influential educator in Shimane prefecture and the head of the society in support of Wakatsuki Reijirou (Kokudoukai). Here continued from the last number we transcribe his diary written on 1898 – 99. Through this diary we can perceive how he as the principal of Shudokan school devoted himself to develop his school and made relationship with important persons of educational society and statesmen and beaurocrats.

Keywords : Watanabe Kanichirou, education, Meiji era